

答辞

2025.3.28

あれは3月上旬のことだった。春の匂いを感じながら小学校の体育館脇を歩いていた。すると、あのフレーズが聞こえてきた。「旅立ちの日に」である。この小学校の6年生は、この曲を歌うのか。なんだかうれしくなってきた。ぜひ、聞いてみたいと思った。ところが、そもそも小学校の卒業式に呼ばれていなかった。春の陽気に誘われながら、体育館から聞こえてくる歌声を味わうしかない。

幼稚園では、さすがに「旅立ちの日に」を聞くことはできないだろうと思っていた。しかしである。修了式の練習をしていたところ、あのフレーズが流れてきた。あるではないか。修了式の退場曲の話になった。年長組の担任も主任も、特にこれという曲はないという。そうであるならばと、「『旅立ちの日に』にしてください」とお願いした。歌が入っているものと、そうでないものがあった。比べてみた。歌なしのほうが断然よかった。おかげで、今年も「旅立ちの日に」に浸ることができた。

「旅立ちの日に」は、中学校の先生がつくった楽曲である。音楽の先生が校長先生に作詞を依頼し、音楽の先生が曲をつけた。もともとは、先生方が卒業していく3年生へ何かプレゼントしたいということで作られた曲だった。サプライズで披露された場が、3年生を送る会だった。

小学校の教員である家人が、中学校の卒業式に来賓として参加した。家に帰ってきてからしきりに言っていた。「『旅立ちの日に』はいい」「やっぱり中学校がいい」そうなのである。中学校の卒業式では、あのイントロが流れるだけで、涙が浮かんでくる。不思議な名曲である。

以前、勤務したことがある小学校では、たった2人の卒業生が歌う「旅立ちの日に」を聞かせてもらった。あれもよかった。この小学校は、この3月で閉校となる。だが、2人が歌ってくれた「旅立ちの日に」をはじめ、思い出はずっと残る。

約1年前のことを振り返った。離任式で、生徒会長を務める女子生徒から「校長先生、来年の卒業式で私の答辞を聞いてください」と力強く言われた。いい眼をしていた。3月になり、もうまもなく3月13日だなど、卒業お祝いメッセージをつくりはじめた。しばらくして、あることに気づいた。そういえば、招待状が届いていない。ということは、卒業式に参加することができない。すなわち、答辞を聞くことができない。コロナ禍が下火となり、卒業式の来賓をどうするというときに、転出職員は呼ばないことにしたような気がしてきた。自分で自分を呼ばないことにしたことか。

3月13日の午後、私が務めていた中学校の校長先生からお電話をいただいた。「無事に卒業式が終わりました」とのことだった。わざわざ私にまで報告してくださったのである。すばらしい方である。前述の答辞のことを話した。私を呼ばなかったことに対して恐縮していた。だが、そうなるようにしたのは自分である。彼女らしいりっぱな答辞でしたとのことだった。答辞を聞いてあげることができなかった。申し訳ないことをした。彼女には、手紙をしたためることにしよう。

「旅立ちの日に」も答辞もいい。これらは、卒業というものがもたらせてくれる贈り物であり宝物である。贈り物には、人の心が込められている。